

第二回尾道大学

「魂の一行詩」講座

角川春樹

四月二十五日（火）

東京発午前十一時三十三分「のぞみ85号」で岡山へ。岡山発午後三時五分「こだま661号」で新尾道へ。午後三時四十五分新尾道着。

前回同様に尾道大学の酒井さんの出迎えて大学へ。応接室で授業が始まる前に、四月十八日（火）に行った初講義の新聞報道のコピーを頂戴（ちようだい）する。

朝日新聞 二〇〇六年四月十九日

新しい文芸運動発祥の地にしたい

尾道大客員教授・角川春樹さん初めて講義、3句作る宿題も

東映映画「男たちの大和／＼YAMATO」制作者で俳人の角川春樹さん(64)が、ロケ地の尾道市にある市立尾道大学の客員教授に就任し、18日、初めて講義した。二年生の「文芸創作入門」の授業で、来年三月まで計十回教える。

角川さんが唱える、季語にとらわれない「魂の一行詩」文芸運動に、日本文学科を持つ尾道大が着目して要請。若者に俳句を教えたいという角川さんが快諾した。

この日は30人の学生を前に、「尾道を新しい文芸運動発祥の地にしたい」と切り出し、「季語は大切だが必ずしもこだわらなくてよい」など一時間半講義。次回までに3句作るよう宿題も出した。学生の作品は主宰する結社誌「河」に掲載するという。

受講した末次麻耶さんは「全講義を受け、いい句が作れるようになりたい」と話していた。

読売新聞 二〇〇六年四月十九日

角川春樹教授デビュー

尾道大で文芸創作入門初講義

今春から尾道市久山田町、市立尾道大の客員教授に就任した出版社会長で俳人の角川春樹さんが18日、日本文学科二年生の選択科目「文芸創作入門」で初めての講義を行った。学生や職員約30人に俳句を通じた表現方法などを教えた。

茶色のジャケットにスニーカーという軽装で教壇に立った角川さんは、自らが「魂の一行詩」と呼ぶ俳句について、「日本文化の根源にある魂を詠うもの。技術にこだわって小さくなってはいけない」と指摘。「句から映像が復元されるか、リズムがあるか、作者自身が投影されているかが作句のポイント」とアドバイスし、受講生が作った俳句を見て「予想以上のでき。これからは楽しみ」と語った。

講義は12月まで計十回。田内美帆さんは「しっかり聞いて表現力を学びたい」と感激していた。角川さんは「受講生には毎月3句ずつ提出してもらい、優秀作は私が主宰する月刊誌『河』に掲載したい」と話していた。

毎日新聞 二〇〇六年四月十九日

角川さん「魂の一行詩」説く

尾道大 客員教授で初講義

出版社特別顧問で俳人の角川春樹さんが尾道大で客員教授として俳句の創作指導をすることになり、18日、初講義した。自身が提唱する季語にとらわれない「魂の一行詩」について熱心に語り、30人の学生が真剣な表情で作句に取り組んだ。

芸術文化学部日本文学科2年の選択科目「文芸創作入門」。3教員が交代で講義し、角川さんは一年間、十回にわたって韻文を担当する。

この日は主宰する俳誌「河」と一行詩の解説文を学生に配り「俳句にとって季語が最重要課題だが、季語に甘えた、あるいはもたれかかった作品は詩ではない」と力説。

「最初から完成されていなくていい。恋愛でも悩みでも、気軽に自分の思いを五・七・五にしてほしい」と語りかけた。

その後、学生は15分間で作句に挑戦。「猫にさえ 先を越される 春の恋」と詠んだ田内美帆さんは角川さんのファンといい「今まで趣味だったけど、力が付いたら本格的にやってみたい」と話していた。

講義で学生が詠んだ句は「河」誌上で選評していくという。

中国新聞 二〇〇六年四月十九日

角川教授、表現を語る

市立尾道大の客員教授に就任した俳人の角川春樹さんの初講義が十八日、同大であった。東映映画「男たちの大和／＼YAMATO」の尾道ロケを縁に一年間、芸術文化学部日本文学科二年の「文芸創作入門」の授業を受け持つ。

講義初日は三十人の学生が受講した。角川さんは自身が提唱する季語にとらわれない俳句「魂の一行詩」を紹介し、「詩歌は言葉が最も洗練されている。創作を通して、日本文化の根底に触れてほしい」と説いた。

学生全員には作品の提出を求め、「ちゃんと一行詩になっている。これは期待できる」などと講評した。主宰する俳誌「河」に尾道大コーナーを設け、優秀作品を発表するという。

受講した岩堀光宏さんは「表現する楽しさを学べた。全講義が終わるころには立派な一行詩を作りたい」と意気込んでいた。

本日は、取材陣は誰もいないが、RCC中国放送の横山雄二君と作家の光原百合さんは私の全講義を聴講するという。角川春樹事務所の海老原実君と横山君に、全生徒二十八名の投句の清記を手伝ってもらうことにした。RCCのプロデューサーでパーソナリティの横山君は、私の製作した映画「戦国自衛隊」に感動してテレビやラジオの世界に飛び込んだ。なにしろ角川春樹に関する限り、当人の角川春樹よりも詳しいというのが自慢の変り種。完全な「追っかけ」だが、女性の「おっかけ」でなくて良かった。恐怖と反省の全くない私にして、異性の「追っかけ」ほど怖いものはない。これ本音。

昨日、産経新聞に渡した原稿は次の通りである。

母恋へば母の風吹く蚊遺香（かやりこう）

遺されて母の扇を開きけり

わが胸に母は生きをり衣被（きぬかつぎ）

すばる忌や鏡のごとき夜空あり

昴忌の夜は風鈴の鳴りやまず

二年前の八月九日、母・照子が急逝した。私は母の忌日を「昴の忌」と命名した。俳句の季語となることによって、死者は二度死ぬことはない。死者の命日は歳時記に載ることで思い出されるからである。

二十八年前、内部分裂を起こした「河」の副主宰に就任して最初にしたことは、全国に角川春樹俳句教室を開くことだった。そして、何が良い俳句なのかを指導する原理として、次の三つを揚げた。

一．俳句とは映像の復元力である。

二．俳句とはリズムである。

三．俳句とは自己の投影である。

「魂の一行詩」と唱える私にとって、この三原則は基本的に変りはない。なぜなら優れた俳句は優れた一行詩であるからだ。私のこの指導によって、多くの弟子たちが次々と俳句の賞を受賞する結果となった。だから、尾道大学の受講生にも、俳句三原則を実施して頂きたい。角川春樹編の俳句歳時記を使用してもらいたい。季語は「いのち」だからである。

本日、第二回目の講座の評価は次の通りである。

特選

十七の小窓の向こうへ想い馳す

横山奈津紀

同時作に、

猫の尾の道はほそみちまよいみち

は生徒たちの互選で第二位の十三点が入ったが、私は並選にも採らなかった。第一回の講座で奈津紀の次の句を激賞した。

本心を隠す両手をはたき落す

「十七の小窓」とは実景の窓ではなく、十七文字の一行詩のことである。作者は十七音の一行詩の世界の向こう側に想いを馳せたと書いているのだ。私の次の句が参考となろう。

きさらぎや十七文字の恋の詩（うた）

春樹

会いたくて会いたくなくて立ち止まる

徳田翼

この句は生徒の互選でも十五点を獲得して第一位だった。誰でも解りやすい恋の句。いかにも思春期らしい好感の持てる愛（う）い愛（う）いしい句。

栗鼠（りす）の瞳（め）に針刺すことを思う夜半

神谷ちひろ

同時作に、

若人の眠り防ぐ猫の恋

「猫の恋」は、一般選で八点入ったが、「栗鼠の瞳」は、今回の投句の中で一番良い。つぶらな栗鼠の瞳に針を刺したいと深夜に思う作者の心情は計り知れないが、読者にさまざまな想像を投げかける。青春の屈折率が微笑ましい。

道行きてまつげに灯る白木蓮（はくもくれん）

槇野未羽

同時作に、

振り返り猫と目が合う春の夕

がある。「春の夕」の句は一般選で五点、「白木蓮」は私の特選三点を含めて七点だった。白木蓮がまつげに灯ると表現したのは繊細で感覚的な一行詩。

火照（ほて）る肌持て余している我二十歳（はたち）

田内美帆

読者の共感が得られる青春句だが、俳句三原則の「リズム感」が「我」によって壊れてしまう。また、俳句も一行詩も基本的に作者本人を詠うことだ。だから、この句の「我」は不要。

秀逸

曇天にとんびと音符低く行く

藤井公子

同時作に、

音翔ってみなと祭の風になる

青年と猫と風とが添い寝する

「みなと祭」の句も私の秀逸、「青春と猫」は佳作なので、投句の全てが私に採られている。

いい人はイヤね悪いのは全部わたし

光原百合

前回の講義の折、

花散ってしばし木のこと忘らるる

に続いての佳吟。「いい人はイヤね」という上五から中七への句またがり勢いがあり、また心理的な屈折がある。中七から下五にかけて、「悪いのは全部わたし」という開き直りが面白い。今、机で読み直すとさすがに人生のペーソスに思いが届き、見事な一行詩。私の秀逸を含めて五点入っているが、特選にしておけば良かった。

誘われし観梅赤い糸は無し

朴耀子

前回の作品、

笠竹（ぜいちく）を振って何する四十坂

に続いての秀逸句。作者は本講座の唯一の正式な聴講生。職業は書画家で今年個展が開かれるという。さて、この観梅の句だが、なかなか手が込んでいる。「赤い糸は無し」とは、運命の赤い糸は私と繋がっていないという断定。観梅に誘ったのは異性。しかし、二人の関係になにも運命的な所はないと言いきったユーモアが一句となった。

髪に降る花にも触れてくれぬ君

難波由美子

同時作に、

永久（とわ）さえもこの手にありし幼き日

「髪に降る」は十点、「永久さえも」は六点で二句とも私の秀逸になったが、句としては「永久さえも」の方が良い。遠い日の作者の手には、永遠さえも実感できたのという幽（かす）かな嘆きは、読者の誰にも共感できるはず。

佳作

鼓動聞く夕日隠れる舞台裏

真野美樹

同時作に、

大渦の波に人酔う春祭

静寂の我が部屋響く寺の鐘

「鼓動聞く」は私の佳作を含めて五点。美樹の全作品を佳作に採っている。

凜とした暗き月夜は一人きり

二宮沙弥佳

私の佳作を含めて十二点入っている。

面倒と言うくせ君は考える

黒木聡子

私の佳作を含めて十点入っている。

生きる意味を必死にうたう蝉時雨

堀田定義

同時作に、

朝寒やきみを焦（こ）がれる偏頭痛

我が街に儚くうつる秋の暮

定義作品の全てを私は佳作に採っている。中でも「蝉時雨」の句は共感を得やすく一般選で十
二点を獲得している。

夕暮れの燃える光に濡れる花

岩堀光宏

同時作に、

夢色に染まる足跡いつまでも

があり、私は二句とも佳作に採った。

向かい風。ペダル踏み込む上り坂

永田悠史

一般選を含め五点入った。

綿を吹き白たんぽぽにまた会はん

未次麻耶

花の色みどりの風がぬりかえる

槌本さくら

同時作に、

春の風へアスタイルおそろいに

があり、共に佳作。「花の色」は私を含め五点入った。

冬空と見紛う程の花吹雪

岡村めぐ美

同時作に、

「うん。」とだけ返るメールに泣くこころ

があり六点入ったが、下五の「泣くこころ」が甘い。別の下五に変えた方が良い。

彼のため口をとがらす君がいる

佐々木なも華

微笑ましい青春句だ。

花揺れて大気が揺れて風光る

柴智寿恵

同時作に、

君と見たあの桜乱吹（ふうけい）を忘れない

があり、共に佳作。

高得点句。

会いたくて会いたくなくて立ち止まる。

十五点

猫の尾の道はほそみちまよいみち

十三点

凜として暗き月夜は一人きり

十二点

生きる意味必死にうたう蟬時雨

十二点

面倒と言うくせ君は考える

十点

髪に降る花にも触れてくれぬ君

十点

【講評】

全体として時間のゆとりもあり、第一回の「魂の一行詩」講座よりも出来の良い作品が多く、今後が期待出来る。特に前回と引き続き横山奈津紀が良く、徳田翼、神谷ちひろ、槇野未羽、田内美帆が光った。